

令和 5年 8月 15日

令和4年度 特別の教育課程の実施状況等について

東京都		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
明晴学園 (外 0校)	学校法人明晴学園	私立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
明晴学園	https://www.meiseigakuen.ed.jp/summary/summary

※必要に応じて行を追加すること。

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
明晴学園	https://www.meiseigakuen.ed.jp/summary/assessment	https://www.meiseigakuen.ed.jp/summary/assessment

※必要に応じて行を追加すること。

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
 一部、計画通り実施できていない
 ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

特になし。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
 実施していない

<特記事項>

2022年度も全体保護者会や保護者との交流を目標とした明晴サロン、マチコミ（学校向け連絡網サービス）、学校だよりや学部・クラスだよりによる情報発信を行ってきた。また、転入生が増えてきたことから、バイリンガル・バイカルチュラルろう教育について理解を深めるために、保護者を対象としたバイリンガル・バイカルチュラルろう教育の講座を行った。

地域住民その他の関係者に対しては、インスタグラムの動画配信、ニュースレターの発行、全国聾教育研究大会と日本手話教育研究大会などで発表を行った。言語聴覚士および言語聴覚士になるためのコースに在籍している学生を対象とした、バイリンガル・バイカルチュラルろう教育シンポジウムを3年ぶりに対面式で開催し、シンポジウムの内容およびろう児の思考スタイルについて紹介した『聞こえなくても大丈夫！人工内耳も手話も』という本を発行した。

2022年9月から11月にかけて大阪の国立民族学博物館で開催された「しゃべるヒト」展では、小学部の子どもたちによる手話ポエム、乳児から中学部・教員同士の手話の発達の様子、「オンライン手話引き辞典」など、展示に協力した。

3. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

3つの教育目標「自ら学び、自ら考える人を育てる」、「豊かな人間性・社会性をもち、多文化共生社会・国際社会に生きる人を育てる」「手話と日本語、ろう文化と聴文化を学び、自分に自信を持って社会で生き抜く力を育てる」のうち、コロナ禍の中でも顕著に見られたのは、自ら学び、自ら考える力の伸長である。特に中学部生徒会が、コロナ禍で制限された学校生活をできるだけ楽しみ、充実したものになるように、中学部生徒による小学部への出張授業、テレビ番組「逃走者」を参考にした「逃歩者」などを企画した。また、自習室の設置、定期試験前の問題作成など、校内の学力向上にも努めた。

学校としても、月1回、全校児童生徒による全体朝の会を行うことで情報交換や交流を促し、幼稚部の行事に小学部・中学部が赴くなど、校内の交流に努めた。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

日本手話と書記日本語によるバイリンガルろう教育の成果を示す方法の1つとして、毎年、中学部3年生を対象とした日本語能力試験（国際交流基金・国際教育支援協会が運営）を行っている。2022年度の中学部3年生のうち1名が初めてN1レベルに合格した。N2レベルが2名、N3レベルとN4レベルにそれぞれ1名ずつ合格しており、中学部3年生のほぼ半数が目標であるN2レベル以上に達している。英語についても、中学部2年生が中3レベルの3級、中学部3年生が高校1年レベルの準2級に合格し、第一言語として日本手話、第二言語として日本語や英語を学ぶという本校のバイリンガルろう教育は教育的効果が上がっているといえる。

学力については、子どもによって大きなばらつきがあることが課題である。学力の伸長の

ためには、日本手話を学習言語能力レベルまで高めること、家庭内における偶発的学習の機会を増やすなどが重要であり、そのためにも引き続き取り組んでいきたい。

4. 課題の改善のための取組の方向性

人工内耳装用の普及により、日本手話の必要性和有効性に対する理解が広がらず、低迷していることが課題である。そのために明晴学園の保護者の協力を得て「聞こえない・聞こえにくい赤ちゃんの育て方」の冊子を配布したり、厚労省・文科省が進めている難聴児の早期発見・早期療育のための基本方針作成や関連のプロジェクトに参加するために、「難聴児支援に関する意見交換会」に出席し、保護者への情報提供に日本手話を用いた子育てを入れる必要があると主張したりするなど、情報発信に努めてきた。

また、「人工内耳も、手話も」の教育実践に関する研究活動として、明晴学園の幼稚部1名、小学部1名を対象として、保護者、学校、言語聴覚士が相談の上で研究を実施している。それぞれ人工内耳装用児、軽・中等度難聴児であり、日本手話を母語としながら自宅では音声を使うというバイモーダルで生活している。日本手話と音声の発達について観察を続け、日本手話の必要性について具体的に発信できるようにしていきたい。